

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(現代)

藪崎 淳子

『國語と國文學』(99巻5号)は「これからの現代語文法」とする特集を組んでいる。その編集後記には「現代文法研究の歴史」を、古典語文法に「付随するもの」であった1980年代以前、「現代語文法が中心に躍り出て」文法現象の記述に「力が注がれてきた」1980年代以降、そして「文法現象がおよそ記述され尽くしたように思われる現在」とまとめ、「これから現代語文法はどのような方向を取ればよいのだろうか」と投げかける。同特集号の井上優「私の対照研究のやり方」では他言語の考察が日本語に関する新たな気付きにつながることを、定延利之「発話への文法的接近」では発話に注意を向けることで文法研究の知見を深められることを、森山卓郎「文法的文体論にむけて」では個別の文学作品の表現を文法的観点から考えることが作品の理解・教育に関わることを、それぞれ具体的に示し、他の領域の視点が現代語文法の研究に広さと深みをもたらすことを伝える。こうした他領域との関連付け以外にも、従来の現代語研究の視点を変え、広げようという動きがある。金澤裕之・山内博之編『一語から始める小さな日本語学』(ひつじ書房)は、17名の執筆者それぞれが違和感を抱いたり面白いと思ったりした一語を取り上げ、データをもとに記述をしている。例えば、知ってはいるけれどあまり口にする事のない「わーい」の使われ方を示したり(小西円「「わーい」っていつ使う?」)、「きっかり」が小学生になじみがない理由をコーパスの分析から明らかにしたり(中石ゆうこ「きっかり10時」)など、細分化し蓄積の多い文法研究の隙間を探すのではなく、実質語一語を究める形で「日本語学研究の新しい領域を開拓」することを企図している。また、佐藤琢三「叙述類型選択原理の諸相と展開可能性」(前掲『國語と國文學』)は、例えば「お茶が入ったよ」がどのような条件下で自然に捉えられるのか、叙述類型の選択に関わる要因について考察しており、文法形式の自然な運用には意味や構造の記述だけでは足りないことに気づかせる。前田直子「これからの現代語文法研究—コーパスの活用と日本語教育のための記述的文法研究—」(前掲『國語と國文學』)も、コーパスを使った数量的分析から日本語学習者にコストパフォーマンスのよい文法が提示できることを示し、記述的文法研究の新たな方向性を考えさせる。他領域との交渉や新たな視点が現代語研究に有用であることが知られるが、こうした新たな展開は精緻な文法記述の積み重ねの上に成り立っているとの思いも抱かせる。西畑宏紀「いわゆる詠嘆のモをめぐって」(『日本語文法』22巻2号)は「君もなかなかやるな」といったモについて、詠嘆の解釈が成立する条件や当該表現から感じる情意性の関係のみならず、並列のモとの関係にも説明を与えており、従来指摘されている現象の見直し・再考の必要性を再認識させる。蓮沼昭子「終助詞「や」の機能再考—「わ」との比較を通して—」(『日本語文法』22巻1号)、阿久澤弘陽「「つもりだ」の意味的特徴」(『日本語の研究』18巻1号)も、現代語研究を走らせる両輪の一方に、文法現象の記述があることを改めて実感させる。

(追手門学院大学)